



農林水産祭農産部門「天皇杯」受賞 (有) 瑞宝

代表 三上新一氏ご夫妻 インタビュー

(代表) 三上新一さん
(妻) 妻 百合子さん

——まずは、受賞の感想を。
(代表) びっくりの一言。

(妻) 皆さんに支えられて受賞できた。町長はじめ様々な機関の方に感謝したい。

——三上さんは先ごろ天皇陛下に杯をお返しされてきたんですね。

(代表) ええ。7組いたが、私が一番最後で、パネルを前に説明をし、陛下とお話しさせてもらった。陛下は、地球温暖化が稲作に与える影響を尋ねられ、私は最近の変化が激しい天候を申し上げた。

(妻) 私は、美智子様とお話しさせていた。私たちが家族の写真をご覧になって「いいですね」と言ってもらい感動した。

——これまでの米作りを振り返ってみてどうですか。

——私には先ごろ天皇陛下に杯をお返しされてきたんですね。

(代表) 様々な苦労はあったが、平成5年の大冷害が大きな転機になった。(この年に平年作に近い収量を確保したおかげで) 行政や周囲の見る目が変わった。このときを境に、取材を申し込まれるようになり、直接販売にも踏み切り、事業が軌道にのった。すべてが、この年に劇的に変わった。

——瑞宝さんはたくさん雇用を生み出して地域経済の活性化にも貢献されています。働いてくれた方々に何かありますか。

(代表) この仕事は皆さんのお世話にならないとやっていけない。本当に感謝している。

(妻) きびしい自然相手で、働く人も大変だと思う。本当にありがたい。もっている。

——瑞宝さんは先ごろ天皇陛下に杯をお返しされてきたんですね。

——三上さんは先ごろ天皇陛下に杯をお返しされてきたんですね。

——三上さんは先ごろ天皇陛下に杯をお返しされてきたんですね。

——三上さんは先ごろ天皇陛下に杯をお返しされてきたんですね。

——三上さんは先ごろ天皇陛下に杯をお返しされてきたんですね。

——三上さんは先ごろ天皇陛下に杯をお返しされてきたんですね。

——三上さんは先ごろ天皇陛下に杯をお返しされてきたんですね。

農業の町が生んだ

平成16年に設立された(有)瑞宝は、代表の三上新一氏が中心となって自然農法による米作りを中心に行っている農業法人です。

三上氏は、昭和38年に自然農法を試験的に開始しました。

当時としては非常に画期的な取り組みでしたが、その技術が向上するまでは数十年の歳月を要しており、苦勞の跡がうかがえます。

平成2年には全面積を自然農法にし、本格的に取り組み始めますが、平成5年に作況

指数28という大冷害が襲ってきます。

しかし三上さんの自然農法で栽培した水田は平年作に近い作柄を確保。これを契機に

脚光を浴び、平成19年に「田中稔賞」、平成21年に「全国農業コンクール」グランプリ受賞を経て、今回天皇杯受賞という栄誉に浴しました。



(有) 瑞宝 代表 三上新一氏

発起人を代表し、小野町長がまず2人を祝福。天皇賞

と田中稔賞を同時に受賞という奇跡のような快挙を、大きくたたえました。

その後催された祝宴では、駆けつけた招待客が次々と受賞者のテーブルを訪れ、2人も各テーブルを回りながら談笑し、祝賀ムード一色の会でした。



こうじづくりの様子

——最後に今後の抱負を聞かせてください。

(代表) 受賞に恥じないようがんばっていききたい。それと、地域の方々の力なくしては、ここまで来られなかった。今後は地域に恩返ししたいと考えている。

(妻) 町の皆さんに恩返ししたい。健康に気をつけて、これからもがんばっていききたい。

会開催

——受賞を聞いたときは？
 こはずかしいやら、何とも言えなかつた。なぜ私が、と思った。これまで地域の方々にいろいろお世話になったので、感謝の意味も含め喜んで賞をお受けした。

——直播栽培や新形質米の栽培からインターネット販売まで、総合的な取り組みをされているようですが、苦労も多いんでしょうね。
 今は米の消費が減って余っている時代。今後も年10万トンずつ減っていくと予想されている。その中で、稲作農家を取り組まなければならぬのは、消費者・



作業の様子

顧客のニーズに合った食を提案することが大事だと思っている。

——商品の販売戦略を、いろいろ議論されているんですか？
 社内では、従業員といるいろいろな議論をするときもある。また、ホームページに寄せられる意見もそうだが、購入者の方に送っている通信（オーガニック通信）をご覧になってこちらに意見を寄せられる方がいる。このような声は、私たちにとても非常に参考になる。

——今後の取り組みや抱負については？
 すでに言ったとおり、米の消費はこのままでは減っていく方向。いろいろな取り組みを模索しているが、今取り組んでいるのは、二

ーズがパンや麺類など粉ものに移っていることをふまえて、米粉作りを始めている。米粉では小麦のパンにはなれないが、新たなおいしさというか食づくりになればと考えている。

減反制度が始まって40年以上経つが、何かしていかなくてはという危機感はずっと作り始めてから常に持っていた。その危機感があり、様々な取り組みを行ってきたが、このようなことを情報発信し続けるのが務めだと思っている。これからは、百姓としての気概を持って、米作りに励んでいきたい。

【天皇杯(左)】 スポーツ及び農林水産業振興のために、宮内庁を通じて25個が下賜されています。農林水産部門には7個下賜され、毎年農林水産大臣賞受賞者の中から選定されます。



【田中稔賞(右)】 元農林省農試場長「田中稔」氏の業績をたたえ、1981年に創設された賞。毎年寒冷地(特に青森県)で顕著な功績があった稲作農家に贈られる賞です。

昭和62年に産地直送を始めた代表の荒関敬悦氏は、「自分の生産した米が消費者にどの程度評価されるのか知りたくて、産地直送を始めたといえます。」

荒関氏は、「環境に逆らわない農業の実践」をモットーにし、土壌診断による農薬に頼らない土作りのほか、米の

特別栽培、直播栽培、新形質米生産や、インターネットを通じた販売、店頭での試食販売などに積極的に取り組み、多種多様な取り組みをしながらも、食の原点である「米」にこだわり続けることを経営の基本にしています。

平成9年には、販売強化に

に向けて(有)ケイホットライスを設立。原点を守りつつも、常に新たな取り組みを模索し、生産・販売への多面的な実績が評価され、今回「田中稔賞」を受賞されました。

2つの至宝

受賞記念合同祝賀

12月25日(金)、町総合文化センター「パルナス」で、2人の受賞を祝う祝賀会が行われ、200人以上が2人の業績をたたえました。



(有)ケイホットライス 代表 荒関敬悦氏

【ケイホットライス従業員のみなさん】



「田中稔賞」受賞

(有) ケイホットライス